

著者に会いたい

海を渡ったサーカス芸人
たちを調査した記録



➡おおしま・みきお 昭和28年、宮城県生まれ。早稲田大学非常勤講師。デラシネ通信社主宰、雑誌「アートタイムス」刊行。サーカスは私の(大学)だった」など著書多数。

『明治のサーカス芸人は なぜロシアに消えたのか』 大島幹雄著

←祥文社
(☎03-3265-2081)
1680円



私は、海外からサーカスや道化師を呼んで日本公演を行なうことを生業としています。海を渡ったサーカス芸人について取材し始めたのは1988年のこと。あるロシア人作家が3枚の写真を手にくう言ったのです。「これはイシヤマ、タカシマ、シマダという日本人のサーカス芸人です。調べてみる気はありませんか」。本書は、そんな彼らの運命を辿った記録です。

調査すると、幕末以降に多くのサーカス芸人が渡航した事実が判った。イシヤマ、タカシマ、シマダが籍を置いたヤマダサーカスがロシアへと向かったのは明治末期。彼らは1917年のロシア革命勃発後も激動の地に残ります。イシヤマはロシア女性と結婚、男の子に恵まれた。後にポリシヨイサーカス日本公演にゲオルギイ・イシヤマという日系ジャグラー(※)が参加。それがイシヤマの孫と知り、何度か話を聞く機会を得たのです。

一方のタカシマはバチや鞠まわしを使う太神楽たかみくらの曲芸で一世を風靡ふうびしました。世界最高峰といわれたジャグラーにエンリコ・ラストリがいます。実は彼はタカシマから太神楽のジャグリングを学び、東洋と西洋の技を融合させたのです。タカシマは、演劇とサーカスを合体させたロシアのアヴァンギャルド芸術にも多大な影響を与えました。最後のシマダについては、長い間手がかりがなかった。しかし3年前、10数年ぶりに訪れたサンクトペテルブルグのサーカス博物館で、学芸員の机の上に置かれた本に目が留まったのです。そこには「アンドレイ・パントシ・シマダのサーカス手記」とあった。それは間違いないく、30年以上も追いかけてきたシマダに関する一冊でした。それを読んで、彼は朝鮮人だとわかった。彼はスパイ容疑で逮捕され、獄中で亡くなりますが、彼の子どもたちが綱渡り、ハシゴ芸、棒技を組み合わせた究極のパランス芸をつくります。

彼らの共通項は、たとえ言葉を知らなくても芸のみを武器に異国で生きる逞たくましさです。私がサーカス芸人に魅せられるのは、命を賭けた究極芸で大衆を喜ばせようとするその覚悟や純粹さ。ロシアではサーカス芸人は、チエーホフやゴッリキなどの文学者と同列の芸術家と認知されています。今後は歴史、映画や美術、科学なども加味した「サーカス学」を広めていきたいと考えています。

